

馬を殺したからす

小川未明

青空文庫

北きたの海うみの方ほうにすんでいたかもめは、ふとして思おもいたつて南みなみの方ほうへと飛とんできました。途とちゆうちゆう中でにぎやかな街まちが下したの方ほうにあるのを見みました。そこにはおほりがあつて、水みずがなみなみと青あおく、あふれるばかりでありましたから、しばらくそこへ下おりて暮くらしました。

この街まちは、この国くにの一番ばんの都みやこでありまして、人々ひとびとはそのほりの中なかにすんでいる魚うおを捕とることができなく、また下おりている鳥とりを撃うつことができないおきてでありましたから、かもめには、このうえなく都合つごうがよく、暮くらしいところでありました。

ほりの中なかにいる魚うおは、それは北きたの海うみにいる魚うおの味あじとは較くらべものになりません。どろ臭くさくて骨ほねが堅かうございしましたけれど、容よう易いに捕とることができましたので、荒あ波なみの上うへで、仕し事ごとするよう骨ほねをおらなくてすんだのであります。

かもめは、もうずっと南みなみの方ほうへいくという考かんえは捨すててしまいました。だいいち、人にん間げというものが、ここにいても、すこしも怖おそろしくありませんので、水みずもそのわりあいあに暖あかであるし、その年としの冬ふゆは、この街まちの中なかで暮くらそうと考かんえました。

かもめは、さまざま街まちのにぎやかな光こう景けいや、できごとなどを見み守まもりました。そして、こんなおもしろいところがこの世界せかいにあるということ、ほかの鳥とりらはまだ知しらないだろ

う。よく、よく、この有り様を記憶しておいて、彼らに教えてやらなければならないなどと空想しました。

寒い冬が過ぎて、春になると、ほりばたの柳が芽をふきました。そして、桜の花が美しく咲きました。このころが、都もいちばんにぎやかな時分とみえて、去年の秋以来見なかった景気でございました。

うかうかとしているうちに、春も過ぎてしまいました。子供らがそれでも隠れてこのほりにときどき釣りなどにやつてくる夏となりました。いままで、かもめはなんの不足もなく、また考えることもなく暮らしてきましたが、このころからようやく考えはじめました。それは、ほりの水の中にすんでいたかもめは、ふたたび青い、青い、海が恋しくなったからです。風が強く吹いて、波が岩角に白く、雪となつてはね上がり、地平線が黒くうねうねとして見える海が恋しくなりました。

かもめは、北の方の故郷に帰ろうと心にきめました。そして、その名残にこの街の中の光景をできるだけよく見ておこうと思いました。ある太陽の輝く、よく晴れた日の午前のことであります。白いかもめは、都の空を一まわりいたしました。すると、大きな木のこんもりとした社の境内を下にながめました。子供らが豆を買って、地面の上に

群むらがつているはとに投げやつていました。

かもめはそれを見みると、まったく驚おどろきました。都みやこというところは不思議ふしぎなところだ。ここにさえいれば、遊あそんでいても暮くらしていくことができるのだ思おもいました。

ついに、このかもめは、北きたをさして長ながい旅たびに上のぼりました。彼かれは、去年きよねんきた時じぶん分のことなどを思おもい出だしていろいろの感かん慨がいにふけりました。高こう山さんを一つ越こえて、もうやがて向むこうに海うみが見みえようとするころでありました。かもめは、一羽わのからすに出であいました。からすはカーカーとなきながら、やはり里さとの方ほうをさして飛とんでゆくところでありました。おしやべりのからすはすぐ、自じぶんの上うえを飛とんでゆくかもめを見みつけて、声こゑをかけずにいられませんでした。

「かもめさん、かもめさん、たいへんにお疲つかれのようなだが、どこへいっておいでになりました。」と、からすは問といました。

すると、かもめは、急いそぐ翼つばさをゆるくして、からすとしばらくの間道連あいぢまちづれになりました。

「私わたしは二、三日前にちまえに、ずつと南みなみの都みやこから出しゅつ立たつしました。去年きよねんの冬ふゆはにぎやかな都みやこで送おくりました。もう夏なつになつて、北きたの海うみが恋こいしくなつたので帰かえるところですよ。」と、かもめは答こたえました。

「それは、いいことをなさいましたね。私などは、いつもこんなさびしい田舎にばかり日を暮らしています。いつになったら、そんなところへいつてみられるかわかりません。」と、からすは歎息いたしました。

「なんのいけないことがあるもんですか、あなたの心がけですよ。幾日も、幾日も、南をさしてゆけば、しぜんにいかれますよ。」と、かもめはいいました。

「たとえば、そこへいつても、どうして食べていけるかわかりません。石を投げつけられたり、みんなに目の敵にされていじめられるばかりです。」と、からすは身の不運を歎きました。

かもめは、都では、はとがみんなにかわいがられて、子供らから豆をもらって、平和にその日を遊び暮らしていることを話しました。

「どうしてほかの鳥は、みんなそう幸福なのでしょう。」と、からすはうらやましました。するとかもめは、からすをなぐさめて、いいますのには、

「からすさん、私見たはとの中には、ちようどあなたのように、色の真っ黒く見えるのがありますよ。だから、あなたも知らぬ顔をして、その仲間入りをしていられたら、だれも不思議に思うものはありますまい。ひとつ都にいつて、大胆にそうなさってはいか

がですか。」と、かもめはいいました。

「そうですか、ひとつ考えてみましょう。」と、からすは答えました。

やがて、かもめとからすとは、別れてしまいました。かもめは海の方にゆき、からすは里の方にゆきました。かもめは、いつしか、昔と同じ生活をしましたけれど、からすは里へいつても、あまりおもしろいことはありませんでした。いつか、かもめから聞いたことを思い出して、

「都へいつて、はどの仲間入りをすれば、なにもせずに楽に暮らしていける。」と、考えましたので、ついにその気になって、南に向かって旅立つことにいたしました。

からすは、かもめのように空を高く、また速く飛ぶことはできませんでした。それでも幾日かかかって、にぎやかな都に到着いたしました。

「なるほど、にぎやかなきれいなところだ。いつも、お祭り騒ぎをしているところだ。」と、思いました。

からすは、さつそく、社の境内へ飛んでゆきました。するといままで、見慣れない鳥が近くにやってきたので、気の弱いとは、一時に騒ぎたてました。からすは、これは困ったと思いました。見るとかもめのいったように、黒っぽい色のはともいました。これは

だんだん彼らに馴れていかなければならぬと、初めは離れたところで、からすは地面に降りて餌を探していました。

しかし、いくら同じように黒っぽくても、からすとはとは、ちよつと見てもよくわかります。子供らは、からすを見つけると、石を拾っていつせいに投げつけました。

いろいろのことを思つて、茫然としていましたからすは、不意に石が飛んできたので、びつくりして立ち上がりました。そして、木の枝に止まって下をながめますと、子供らは、なお自分を目掛けて石を投げるのであります。

からすはしかたなく、その社の境内から逃げ出しました。けれど、どこへいっても、自分を仲間に入れてくれるほどの群れはありませんでした。そして、人間に見つけられると憎まれ、また追われました。ちようどそのことは里にいたときも同じことです。むしろかえつて、都のほうがいっそうひどいように思われました。

からすは、はとの仲間入りすることは断念しましたが、都の空は煙でいつも濁つていて、それに、餌を探すようなごみためがいたつて少ないので、そこにいる間は餓えを忍びなければなりませんでした。からすは、この都がちつとも自分にとって、いいところではありませんでした。

「こんなことになるのも、みんなかもめのいったことを信じたからだ。」と、彼は、かもめをうらみしました。

しかたなしにからすは、ふたたび、自分の産まれた里を指して帰ってゆきました。こんなことがあつてから、このからすは、ひとをおだてたり、うそをいって困らせたりすることを喜ぶようになりました。それもまったくかもめの言葉を信じて、とんだめにあつた復讐を他に向かつてしたのでございます。

ある日、からすは田の上や、圃の上を飛んで田舎路をきかかりますと、並木に牛がつながれていました。その体は黒と白の斑でありました。そして、脊に重い荷をしよつていました。これを見ると、さつそく、からすはその木の枝に止まりました。そして、下を見おろしながら、

「牛さん、牛さん、主人はどこへいった。」と聞きました。

牛は、稲やかな大きな目をみはつて、遠方の日の光に照らされて暑そうな景色を見ました。からすが頭の上でこう問いますと、

「俺の主人は、あちらの茶屋で昼寝をしているのだ。」と答えました。

これを聞くとからすは、

「なんて人間にんげんというやつは自分じぶんかつてなんだ。おまえさんなぞは、人間にんげんの幾倍いくばいとなく力が強いちからつよじゃないか。なぜこんな綱つななんか断ち切きつてしまつて、山やまの中なかへ逃にげていかないのだね。山やまの中なかへ入りや、草くさもあるし、水みづもあるし、木きの実みもあるし、遊あそんでいて楽らくに暮くらしてゆけるじゃないか。そして、獣物けものの王おうさまにならないともかぎらないじゃないか。」と、おだてました。

牛うしは黙だまつて、からすのいうことを聞きいていましたが、なんとなくそれを信しんじることができませんでした。

「いったい、そんなことができるだろうか。」といいました。

「なんでできないことがあるものか、おまえさんたちは臆おくびよう病びようなんだ。」と、からすはいいました。

「先祖せんぞだいだい代々だいだいから、まだそんな乱暴らんぼうなことをしたものを聞きかない。」と、牛うしは答こたえました。

「やればできたんだが、みなおまえさんのような弱よわむし虫むしばかりだ。」と、からすはいいました。

人ひとのいい牛うしも、つい腹はらを立たてずにはいられませんでした。

「小さな癖に、なまいきをいうな。」と、上を向いて太い鼻息を吹きかけますと、からすはびつくりして、

「ばか、ばか。」と、悪口をいつて逃げ去つてしまいました。

からすは、ついに牛をおだてそこないました。そして野や、圃の上を飛んできますと、今頃は一匹きの馬が並木につながれていました。その馬は脊の高い、まだ年若い赤毛の馬であります。からすはさつそく、その木のいちばん下の枝に止まりました。馬は、足との草を食べていました。

「お馬さん、お馬さん、あなたがほんとうにかけ出したら、どんなに疾いでしようね。私にはあなたのようなりっぱなお馬さんが、こうして綱で縛られているのが不思議でならないのですよ。なぜこんなところにまごまして、朝から晩まで重い荷をしょわされていなければならいんですか。」と、からすがいいました。

「おまえはだれかと思つたらからすか、よく俺の足が疾いことを知っているな。ほんとうにかけ出したら、どんなものでも追いつけるものでない。けれど逃げ出したって、いきどころがないじゃないか、それとも、どこかいとところがあるというのか。」と、若い馬は問い返しました。

「それはありますよ。だれも束縛そくばくするようなものがない、そして、暗い夜くらよるというようなものもない、まったく自由じゆうで、一日いちにち明るい昼ひるばかりのよい国くにがありますよ。」

「それは、いったいどこだ。」

「それですか、西にしの紅あかい夕焼ゆうやけのする国くにです。毎日まいにち、あなたはその方ほうを見るでしょう。

いつもその方ほうを見ると、愉快ゆかいにはなりませんか。」と、からすはいいました。

「愉快ゆかいになるよ。俺おれは夕焼ゆうやけの方ほうを見るのが大好きだいすだ。けれど、そんないい国くにがあるなど

とは知らなかつた。おまえは、ほんとうにいつて見てきたのか。」

「私わたしは、太陽たいようの近くちかまでいつて見てきました。」と、からすはいいました。

「太陽たいようの近くちかへ？ 真紅まつかだろうな。しかしおまえは翼つばさがあるからゆける、俺おれには翼つばさがな

い。」と、馬うまは悲かなしそうに答こたえました。

「そのかわり、疾はやい脚あしがあるじゃありませんか。どんなところでも、あなたなら飛び越とこせないことはありません。」と、からすはいいました。

「たいていのところなら飛び越とこせるつもりだ。」と、馬うまは答こたえて、しばらく考かんがえていました。

からすは、今度こんどはうまくやったなど、高たかいところへ飛とんでいつて、じつと馬うまのすること

を見ていました。すると、馬は不意にはねだしました。そして脊中に積んであった荷物をみんな落として、綱を切り放つて、野となく林となくかけてゆきました。からすは、馬がしまいにどうするか空を飛んで従ってゆきました。馬はついに林や、野や、おかを越えて、海の辺りに出てしまいました。日はようやく暮れかかって、海のかなたは紅く、夕焼けがしていました。馬はじつとその方を見て、かなたの国にあこがれながらも、どうすることもできませんでした。

「やつてみる！ おまえならこの海を飛び越せるだろう。」と、このとき、空でからすがいいました。

馬は、ほんとうにそうかと思いました。そして、一思いに海を飛び越そうとはね上がりました。けれど、二間とは飛べず、海の中に落ちて死んでしまいました。これを見たからすは、

「あほう、あほう。」といいながら、飛んでいつてしまいました。

その年の暮れ、大雪が降つて寒い晩に、からすは一つの厩を見つけて、その戸口にきて、うす暗い内をうかがい、一夜の宿を求めようと入りました。するとそこには白と黒のぶちの肥った牛がねていました。

「おまえは、いつかのからすじやないか。あのととき、おまえのおだてにのって山の中へ入
つてみる、この大雪に、どうして安らかにねることができるか。おまえのようなうそつ
きには、宿を貸してやることはできない。」と、牛は追いたてました。

からすは、大雪の中をあてもなく、そこから立ち去ったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「おとぎの世界」

1919（大正8）年8月

※表題は底本では、「馬《うま》を殺《ころ》したからす」となっています。

※初出時の表題は「馬を殺した鳥」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

馬を殺したからす

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>